

楽士と幽霊 がくし クロアチア

昔むかし、ある村で、結婚式がありました。みんなは、教会の前で、にぎやかに食べたり飲んだりしていました。

ほろ酔いきげんの楽士が、ふと墓場はかばに入って行きました。すると、されこうべがひとつ落ちていました。楽士は、まんじゅうをひとつ、されこうべの齒のあいだにつこんで、

「ほら、おまえにも婚禮のまんじゅうを分けてやるよ」といいました。

されこうべは、齒をがくがくかみ合わせて、まんじゅうをのみこみました。そして、

「どうもありがとう。きょうはあなたが食べさせてくれたが、あしたはわたしが食べさせてあげよう」といいました。楽士は恐ろしさに凍りついて突っ立っていました。

やがて、みんなの所にもどると、みんなは、楽士が青い顔をして黙っているの、どうしたんだとたずねました。楽士は、重い口を開いていいました。

「墓場で、されこうべにまんじゅうを食べさせてやったんだ。そしたら、あしたはそいつがおれに何か食べさせてくれるっていった」

さあ、みんなは、お祝いどころではなくなりました。あしたは幽霊が楽士をむかえに来るので。みんなは何とかして楽士を助けようと相談しました。

真夜中、みんなは楽士をまんなかにして取り囲みました。とつぜん、楽士が鳥のように空に上がって、消えました。みんなは、祈ったり、呼んだりしましたが、楽士はもどって来ませんでした。

さて、幽霊は空を飛んで、楽士を遠くまで運んで行きました。やがて、りっぱな御殿ごてんに着きました。御殿には、だれもいませんでしたが、とても優しい楽しい気持ちにさせてくれました。幽霊は、楽士を食堂に連れて行っていました。

「ここはわたしの家です。お気に召すものは何でも食べたり飲んだりしてください。わたしはこれから出かけてはなりません。もしだれかが来てわたしを探していたら私は留守だといってください」

そういうと、幽霊は出て行きました。

楽士があたりを見まわすと、部屋は、美しい物、楽しい物でいっぱいでした。テーブルにはいろんな料理が並べられていました。そこで、腰を下ろして食べはじめました。

「おどろいたなあ。すばらしい所だなあ」と、楽士は思いました。

不意に、コツ、コツと、戸をたたく音が聞こえました。楽士は、「どうぞ！」と答えました。す

ると、背中にたるを背負った男が入って来ました。たるには土がいっぱい入っていました。男は土を床にぶちまけて、

「ご主人さまはどきです」とたずねました。樂士は、

「留守ですよ」と答えました。

「いつお帰りですか」

「知りません」

男はため息をついて、また土をかき集めると、たるに入れもどして出て行きました。

樂士は、家のあちこちを見物して回りました。それからテーブルの所にもどると、また、コツ、コツ！と、戸をたたく音が聞こえました。樂士は、「どうぞ！」と答えました。すると、背中に大きなふくろをかついだ男が入って来ました。ふくろには、金貨がいっぱいつまっていました。男は、金貨をみんな床に投げだして、

「ご主人さまはどきです」とたずねました。

「留守ですよ」

「いつお帰りですか」

「知りません」

男はため息をついて、金貨をかき集めると、ふくろに放りこんで出て行きました。

樂士は、またあちこちの部屋を見て回って楽しくすごしました。それからテーブルの所にもどると、また、コツ、コツ！と、戸をたたく音が聞こえました。樂士は、「どうぞ！」と答えました。すると、背中に大きな女を背負った男が入って来ました。男は、女を床に投げだして、

「ご主人さまはどきです」とたずねました。

「留守ですよ」

「いつお帰りですか」

「知りません」

男は、ため息をついては、また、ため息をつき、やっこの思いで女をかついで出て行きました。

しばらくすると、幽霊が帰って来ました。幽霊は、樂士に、

「わたしのもてなしに、満足していただけましたか」とききました。

「はい。こんなにりっぱな物やいい物を、今まで見たことも味わったこともありません」と、樂士は答えました。そして、

「ただ、しよっちゅうだれかが戸をたたいて、あなたのことを探していました」といって、留守中に

やつて来た男たちのことを話しました。幽霊はいいました。

「土を運んできた男は、わたしのとなりの人でね。生きているとき、いつだつてうちの土地をけずりとつていたんです。今になつて、しじゅう返しにくるんですが、ここには土をおさめるところなんかありませんよ。それから、金貨を運んできた男は、わたしからお金を借りた人です。借りたお金を自分の物にしてしまつて返してくれませんでした。今になつて、しじゅう返しに来るんですが、今じゃお金に用はありません。三人目は、わたしの妻を取った男なんです。それが今になつてしじゅう返しに来るんです。今さら妻に用はありません」

いい終わると、幽霊は、「そろそろ地上に送つて行こう」といいました。楽士は、

「まだここに来て三日しかたつていないんですよ。もう少しさせてください」とたのみました。幽霊は、

「いいですか。あなたはここに百年以上いるんですよ。もとの場所にお帰りなさい」といいました。そして、楽士をさつと小わきにかかえて飛び立ちました。

楽士がわれに返ると、教会の前にはいました。髪はすっかり白くなり、からだはやせて腰が曲がつていました。近くで遊んでいた子どもたちに、

「婚礼に出ていた人たちはどこだね」とききました。子どもたちは走つていつて親たちを呼んできました。親たちは、楽士のいうことがわからず、村で一番物知りの年寄りを連れて来ました。その人は、

「ひとりの楽士が婚礼の最中に幽霊に連れ去られた話は、聞いたことがある。でも、百年以上も前の話だ。そのとき婚礼に出ていた人は、もうひとりも生きていないよ」といいました。

楽士は、今まですばらしい御殿にいたことを話すと、たおれて死んでしまいました。そのとき、楽士の体から一羽の白いはとが飛び出して、天国に飛んで行きました。

村上郁再話

資料『世界の民話4東欧Ⅱ』飯豊道男訳／ぎょうせい